

2022年3月13日 受難節第2主日礼拝

メッセージ「外に立つ」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 3章20-30節

先日の3月11日は、あの東日本大震災から11年目となる日でした。あの震災を東京で経験した小学生の息子が言うには、昨年までは学校で「黙祷」の時間があったのに、今年はなかった。何故だろうと友達と話していて、「10年を超えたから無くなったんじゃないか」と考えたそうです。もちろん、10年を超えて11年を迎えても今年も各地で、あの震災と被災者の方々を覚える祈りや集まりが行われていました。とくに被災者の方々にとっては、10年経っても20年経っても、いつまでも変わらない記憶なのではないかと思います。

そのような中、私の目に入ってきた一つのニュースがありました。東日本大震災の津波によって、大きな被害を受けた岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」の根っこが、東京で展示されるというものです。「奇跡の一本松」というのは、ご存じの方もいるかもしれません。元は「高田松原」と呼ばれていた場所で、江戸時代から約7万本の松が植えられていた景勝地だったそうですが、そこであの津波を耐え抜いた奇跡の松ということです。震災復興のシンボル、あの震災の記憶を風化させないためのシンボルとして有名になりました。私も11年前に、支援活動のために現地に行き、とりあえず車だけは通れるようにされた道路の両脇に積み上げられた瓦礫の山の中、海辺に立つその一本松を見たことを覚えています。

しかし、私が違和感を覚えるのは、その一本松だけが何か特別だったわけではなかった、ということです。その松の前にはユースホステルの建物があり、その建物によって津波の直撃を免れたということも、その松が残った理由だったそうです。また陸前高田の町に限らず、大船渡でも、仙台でも、どこへ行っても鉄筋コンクリートのビルまでなぎ倒され、流されているかと思えば、そのような瓦礫の中でもポツンと木造の住宅が残っているという不思議な光景に出会うことが多くありました。「何故そこだけが残ったのか」「周りの建物がどのように津波を防いでくれたのか」「その場所の地形、津波の流れはどうだったのか」など、後からいくら考えても、もはや分かりようがありませんが、津波というのはそれくらいに複雑な動きだったのだらうと思います。そのような中で、あの陸前高田の一本松も、様々な要因の末に

残ったというわけです。

とはいえ、その一本松もその翌年には枯れてしまったために、伐採して、根っこも掘り起され、今は中身をくりぬいて金属や硬化プラスチックを注入して固めた複製がモニュメントとして現地に立っているそうです。募金によって賄われたとはいえ、多額のお金と労力をかけて、そのようなことをする必要があったのかということには、賛否両論があったようですが、松原という観光資源を失った町にとっては、全国の人々に覚えてもらい、見に来てもらえる場所を作るということに、意義があるということだったようです。そして、その松の根っこが東京で展示されているとのことでした。あの震災や津波の被害から 11 年が経ち、当時を知らない子どもたちも増えてきました。そのような中で、記憶に留めておこうとすることも、もちろん大切なことだとは思いますが、なんだか「木を見て森を見ず」のことわざのように、全体として見るべきもの、本当に覚えておくべき大切なことを忘れてしまっているような気がしてなりません。それこそ、7 万本の中でその一本松だけが唯一「大きくて、立派で、根っこも丈夫だったから、これだけが生き残った。その生命力にあやかりたい」と誤解されてしまうことはないのでしょうか。



さて、私たちは今、イエス様が十字架に架けられていく道を思い起こすレント（受難節）の季節を過ごしています。十字架はキリスト教のシンボルとして、教会のマークにもなっていますが、もともとはローマ世界に限らず、日本でもアジアでも、恐らく世界中のどこでも見られた犯罪者を見せしめのために磔にして、公開処刑するための道具でした。紀元 1 世紀前後のパレスチナでも、イエス様以外にもたくさんの人々が十字架に架けられて処刑されていました。にもかかわらず、私たちは

他の何百何千という十字架には目を向けず、イエス様の十字架だけに目を向けています。それはともすると、あの陸前高田の「奇跡の一本松」と同じようになってしまっていないでしょうか。

私たちが「イエス・キリストの十字架を見上げる」と言う時、またその「死と復活を覚える」と言う時、それは一体何を意味しているのでしょうか。十字架のアクセサリーを身に着けることに、厄除けや開運のお守りとしての効果がるのでしょうか。また「十字架、十字架」と唱えることに、お題目、おまじない、天国へのパスポートとして、効果があるからでしょうか。もちろん、そんなはずはありません。「イエス・キリストの十字架を見上げる」と言う時、それはその十字架に架けられるに至るまでのイエス様の言葉と振る舞いに目を注ぐということと不可分のことであって、真実の命に生きたイエス様の生きざまに従って、私たちもまた真実の命を生きようとする事なのではないかと思えます。そしてそれは多くの場合、世の中心をなす価値観からは外れているために、人々から排斥され、十字架に代表される苦難へと追いやられていくものでもありました。

今回の聖書のお話は、「ベルゼブル論争」という小見出しが付けられていますので、いかにも律法学者たちとの議論の中で、イエス様の迷いのない、ブレない物言いに、学者たちはたじろぎ、群衆は深く感心した、ということが述べられていると読んでしまいそうです。ですが、私はむしろイエス様が律法学者たちから疎まれて、対立していただけではなく、21 節にあるように、親しいはずの身内、イエス様のことを理解してくれているはずの家族からさえも、「気が変になっている」と思われていた、それくらいにイエス様の言葉と振る舞いは、当時の社会の常識からは外れていたということにこそ、注目すべきではないかと感じました。

確かに、乳児死亡率が高く、女性は 10 代での結婚も当たり前で、平均寿命は 40 数歳と考えられている時代に、30 歳になっても家業も継がずに、一人で家を飛び出して放浪の旅に出るというのは、現代の感覚で考えても非常識です。家族にとっても彼は困った存在で、それこそ家に帰ってきたら、周りの目もありますから「恥ずかしい」と感じるような存在だったのかもしれませんが。ですから、イエス様は、当時の社会常識からすれば、決して真ん中にはおらず、むしろ常識の外側に立っていたわけです。病気のため、悪霊に憑りつかれていて穢れているから、交わってはいけないと言われている方々と、イエス様は積極的に交わり、その悪霊を追い出

したとされています。実際には、精神的に錯乱状態にあった人たちが、イエス様との交わりの中で落ち着きを取り戻したということだったと考えられますが、その様子を遠巻きに眺める人々からは「あんな人々と接しているあの男もまた穢れている。悪霊に憑りつかれている」と蔑まれていた、ということでした。

それでもイエス様は、そんな周囲からの評価、世間の中心に近い権力者たちからの非難にも、また親しいはずの身内からの誤解にもめげず、流されず、世間の常識の「外に立つ」ご自身の道を歩まれました。今回の聖書の箇所は続き、31節から35節には、その後の話として、イエス様の母親と兄弟が人をやって、群衆たちの中にいるイエス様を呼ばせたところ(31節)、イエス様は自分の周りにいる人々を指して「私の母、兄弟はここにいる人たちであり、神の御心を行う人たちである」と答えられた(34—35節)と記されています。世間の常識の外に立つ人たちこそが、命の神の価値観からするとむしろ中心であり、身内ということだったのでしょう。

「上のものが下になり、後のものが先になる」世の価値観を逆転させる神の国の価値観。命の神は誰と共にどこに働いておられるか。常に世間の常識の外とされる場所に立ち、弱く小さくされていて、価値がないと見なされていた人々と共に歩まれたイエス様。見えなくされていたものに、目と心を注がれていたその生き様に、私たちも従う者へと変えられていきたいと願います。今、世界中が悲鳴を上げています。ウクライナとロシアで行われている戦争では、たくさんの偽の情報が発信され、何が真実なのかが分かりにくくされていますが、多くの人々の血が流され、苦しめられていることは事実です。常に核兵器の使用に全世界の人々が脅えています。それらは明らかに命の神の御心に反することです。剣に対して剣を取るのではなく、非暴力と不服従によって世界中の一般市民たちが声を上げることによって、この愚かな戦いが一刻も早く終わられるように祈ると共に、今最も弱く小さくされている方々に必要な助けが届けられますように、私たちも用いられていきたいと願います。

国のためや町のためという大きなものに巻かれるのではなく、たとえ世間の常識の外に立ち、茨の道であったとしても、イエス様が歩まれたように命の神の目が注がれているところ、弱く小さくされ私たちが必要とされている方々の隣に、私たちは今日もイエス様と共に遣わされていきます。